

『訪問看護でのグリーフケアを通して見えた事』

～後悔しない時間を過ごしてもらうために～』

○赤木彩子

【はじめに】当訪問看護ステーションは平成23年より緊急電話体制を整えることで、在宅看取りの件数が、介護保険・医療保険ともに増加している。終末期を迎える方の病態や障害は様々だが、「最期は自宅で迎えたい」「家で過ごさせたい」という本人・家族の希望にできる限り寄り添い関わっている。残された時間が少ない中で介護者へ、これから予測される身体的、肉体的変化についてパンフレットを用い説明を行ってきたが今回、遺族に直面し、話を伺う機会を設け、大切な家族を看取る場面に私たち医療者が提供する情報に不足していた部分があったか、今後取り入れるべく情報は何かを検討し、内容の見直しを行い、新たに看取り後のパンフレットを作成したので報告する。

【方法】当事業所がH29.4～H30.3までの期間、看取りを行った15名中13名の遺族を訪問し、行ってきたケアを振り返り、インタビュー形式で、終末期の介護から看取り、亡くなってから現在までのお気持ちを伺い、具体的に必要とした情報の聞き取りをした。

【結果・考察】家族は終末期の介護で疲労はピークを迎えている。生前に看取り後の情報提供をしても理解できない事がある。看取りの前と後では必要な情報が異なってくる。実際にご自宅を訪問し、故人を偲び語りまた遺族を労う時間を設け生の声を聴くことができた。亡くなってから話を伺うまでの期間が一年足らずと日が浅く、悲観からまだ癒えない中でかけがえのない話を伺うことで、今後のケアの道標となった。

【結論】現代社会では核家族、高齢者世帯、家族間の関係性など、置かれている立場は様々で、身近な人を見送る経験は初めての人も多い。看取り後は、家族から遺族に立場は変わり書類の手続きや葬儀の準備が始まる。後から「こうしてあげればよかった」という、自責感を生じる事がないようターミナルケアのプロセスを確立する必要がある。

